

6. カナダ講座序論

沖 田 哲 也

カナダの、とくに社会科学的人文科学的学門体系に手をつける第一歩は、いわゆるカナダ文化の構成要因を見定めておくことが不可欠であろう。このための方法のひとつとしてカナダ社会は複雑な因子によって形成されたというその過程の追求つまり歴史的な経緯の認識があげられる。たとえば大きくわけて、アングロフォーンとフランコフォーン — 例えはこの両者は使用言語が異なる二種のひとびとをさすことよりも、むしろ社会科学的なさまざまなカナダ事象の二分類をさすことが多い。例えばこれはしばしば二つの対立する利益関係や生活文化の類型化に用いられる。

ところでこうした二類型 — ただしカナダの実態は移民国家であるために多元的文化社会であり二類型に限らないが — の発端はカナダ歴史に明記されるところによる。カナダ中央部から東とアメリカの中西部からオハイオに至る広大な領土を所有していたフランスは1605年からいわゆるカナダ植民地の経営に乗り出している。他方イギリスも1613年フランスの拠点ポール・ロアールを襲撃、両国の抗争が開始され1713年ユトレヒト条約によってフランス支配地のことごとくがイギリスの掌中に帰することとなる。

しかし、イギリスのこうした強力な支配にとって、実は南のアメリカの革命と独立が、強力な脅威となり、ためにカナダに残存しているフランスの一部の勢力と妥協しつつ、アメリカに対抗せざるをえなくなる。

ユトレヒト条約によって全土を掌中に入れたイギリスは、全土にイギリス法の適用を国王宣言によって布告するが、その二年後、イギリス国王によってカナダの地に赴任したカールトン総督は、アメリカ独立派に対峙するためにはケベックのフランス人を懐柔し、ケベックをイギリスの基地とする考えを述べている。この考えに従って国王宣言による広大なイギリス支配地の一部が取り消されて、ケベック植民地の拡大が再布告されフランス型の領主制とローマンカソリックの教会を存続させるに至った。

こうしてアングロフォーンとフランコフォーンの二類型は単なる分類的タームに用いられるばかりではない経緯が存在している。

さらにつけ加えれば、アメリカ独立に反対しこれに脅威を感じ、イギリスに忠誠をもったひとびと“ユナイテッド・エムパイアー・ロイヤリスト連合王党派”の存在である。彼らはアメリカからこうした意味で逃避してきたひとびとで、亡命後、カナダの地でイギ

リス型のインペリアル・エスタブリッシュメントの地位に着く。つまり地域特権階層となって支配的位置についた一群の流入者であった。かくてこの国の形成初期はかかる諸グループの歴史的足跡と位置づけを除いては見極めがたい一面がある。